

社会福祉教育における「他者理解」の体験学習： 「ホームレス」になって感じ得ること

金子 充*

1. はじめに

本報告は、立正大学社会福祉学部社会福祉学科の開講科目「ソーシャルワーク演習Ⅰ」において、筆者が担当するクラスで実施した「ホームレス疑似体験学習」の趣旨およびその方法を報告するとともに、参加した学生のレポートを手がかりにその成果について考察したものである。

ソーシャルワーク演習Ⅰは、当該学科でソーシャルワークを学ぼうとする者等が2年次前期に履修する選択科目である。この授業科目のねらいは、社会福祉士養成の一般的なカリキュラムにしたがい、「自己理解・他者理解を深め、ソーシャルワーク援助が行われる場を理解し、基本的なコミュニケーション技術を習得する」。「また、ソーシャルワーカーにむけての自己の適性と将来を考える機会とする」とされている（シラバスより）。

2012年度の担当クラス（履修者15名）において、筆者は「自己理解・他者理解」をいっそう深めるためのインパクトのある体験学習を実施したいと考えた。そこで、学生たちに、社会の最底辺で生きる生活困窮者、とりわけホームレス（野宿生活者）の〈生きざま〉および〈エージェンシー（行為主体性）〉について、当事者の視点にもとづいた疑似体験を通して感じ、考えてもらうことにした。

2. 体験学習のねらい

この体験学習で最も重視したことは、多くの社会福祉教育やソーシャルワーク教育が陥りがちなパターンナリズムや啓蒙・告発的な導きをできるだけ排し、「当事

者の視点」への気づきをうながすこと、あるいは「当事者の〈エージェンシー〉」を感じ取ってもらう（さらには、自身の内にある〈エージェンシー〉を呼び起こす）ことである。

ここでいう〈エージェンシー（agency）〉とは、ルース・リスターによる貧困研究のエッセンスをヒントにしたものであり、当事者が有している「行為主体性」を意味している。リスターは、従来の貧困研究の主題がパターンリスティックな貧困把握や貧困調査に終始しており、貧困者＝当事者の〈エージェンシー〉、あるいは「主体」や「当事者性」をとらえる議論がほとんど展開されていないことを批判している（Lister, 2004=2011）。この議論では、貧しい人びとによる「やりくり」「反抗」「脱出」「組織化」の4つの〈エージェンシー〉をとらえるための枠組みが示され、貧困者であっても生活を能動的・創造的に築いていこうとする主体性をもっていることが論じられている（Lister, *ibid.*, pp.181-227）。すなわち、貧困状態にある当事者であっても、〈なしうること〉や〈すでに力を発揮できていること〉があるはずだという主体解釈である。こうした問題意識から、貧困状態にある当事者の「生きざま」をトータルに理解するための視点、いわば「ストレングス視点」で貧困をとらえる枠組みが提示されている。

今回筆者が授業のなかでおこなった体験学習でも、学生たちにこの視点にもとづいて当事者を想像し理解する必要性や、理解しにくい「他者」である当事者の〈生きざま〉を知ることのワクワク感を体験してもらいたいと考えた。「他者」とはそもそも理解しにくい存在であり、それを知ることの喜びを知ってもらいたいとの思いである。

* 立正大学社会福祉学部社会福祉学科

キーワード：ホームレス、社会福祉教育、体験学習、他者理解

ソーシャルワーカーの養成教育では、支援者＝専門職者としてのソーシャルワーカーと支援を受ける側である利用者という立場性（権力関係）を前提に、「アセスメント」や「ニーズ把握」を展開していく必要性が強く語られる。ソーシャルワーク実践においてそのような権力関係や専門的な面接スキルが不可欠な場面があることは確かだろうが、社会福祉を幅広く学ぶ学生一般に対しては、こうした専門職者としての視点やスキルについての学びばかりでなく、理解しにくい「他者」を知ることの喜びについていっそうの気づきをもたらす学びがあってもよいはずであろう。

また、社会福祉学や社会福祉教育一般においては当事者の存在やその「問題性」を社会に告発、啓蒙することの意義がしばしば説明される。「問題」の可視化や政策の対象化を求めるのであれば、啓蒙・告発の観点から当事者の「実態」を把握することに一定の意義があることも確かだろう。その延長で、「問題」の可視化や事実関係の理解等を目的にした「貧困教育」や「ホームレス教育」が広くおこなわれるべきであることも確かである（生田，2005；宇都宮・湯浅，2008）。

だが、そのような「問題性」の発見、告発、啓蒙といったパターンリズムを取り除いたところで、人間の〈エージェンシー（行為主体性）〉に着眼し、純粹に「他者」たる当事者を深く理解しようとする姿勢をとることの意義について、社会福祉を学ぶ学生に知ってもらいたいと考えた。こうした学びによって、「他者」たる当事者が、ともにコミュニティを築き共生していくべき人間であることへの気づきをおこなうことができるだろう。

以上の視点から、社会への啓蒙・告発に向けた当事者の「実態把握」ではなく、あるいは専門的ソーシャルワーカーとしておこなうアセスメントやニーズ把握のためでもなく、ましてや当事者に対する憐憫でもない「他者理解」をおこなう学びが社会福祉教育にいっそう取り入れられるべきであると考え、今回は「ホームレスの疑似体験学習」という特異な学びの手法を構想した。もちろん、ほんらいであれば「本当の当事者」のいるフィールド（例えばドヤ街や河川敷）へ出向き、対面し、実際にコミュニケーションをとることからはじめるべきであろうが、大学の地理的な制約、時間割上の制約、および統一的なカリキュラムで授業を展開しなければならないという制約等から、このような疑似体験学習となった。担当者の力量や専門性による限

界があることは言うまでもない。なお、フィールドワークによる体験学習の方法および成果の考察については、鈴木忠義による優れた論考があり、大いに参考にさせていただいた（鈴木，2010）。

3. 体験学習の事前準備

今回実施した「ホームレス疑似体験学習」は、クラスのすべての学生にダンボールやブルーシートを使って「ホームレスの家」を建ててもらい、その「家」に自ら一定時間滞在することで、身をもって「ホームレス」を体験するという内容の授業であり、多くの部分は綿密な計画を立てることなく、手探りですすめた。

〈ホームレスのイメージを絵にする〉

授業で、初回にまず「ホームレスのイメージ」についてそれぞれ「絵」に描いてもらい、「絵」を見せあいながらグループでディスカッションをしてもらった。「絵」は、当事者の顔の表情や服装、持ち物、住んでいる「家」の家財道具に至るまでディテールをしっかりと描いてもらい、自分たちが「ホームレス」をどのようなとらえているかを自覚してもらった。これは、ある意味で「自己理解」にもつながっている。

また、どのようなホームレスの「家」を建てるのか、グループで計画を練ってもらった。「家」の材料はどうするか、どこから調達するか、どこに建てるかなどである。「家」はできるだけリアルなもの（公園や河川敷にあるような、本当に生活できるようなホームレスの「家」）にするよう再三お願いをした。

〈どのような家を建てるのか計画する〉

計画を練るなかで、ホームレスの「家」に必要なものはダンボールとブルーシートだけでないことが話し合われた。すなわち、衣食に必要な家財道具、寝具、あるいは余暇のためのツール（ラジオ、馬券、アルコール類）や仕事の道具（新聞紙、空き缶、ゴミなど）を用意することが重要であるとされた。この議論のプロセスは、生活必需品とは何か、「生活」とは何か、あるいは「生きる」とは何かについて、学生たちの想像力を豊かにさせたかもしれない。

図1・図2は、学生たちが「ホームレス」や「ホームレスの暮らし」をイメージして描いた絵の一部である。学生たちが描いた絵のほとんどに登場する「ホー

ンでは、「家財道具」を調達するために「ゴミ置き場」に出向くのが手っ取り早いという話になった。そこで、授業時間中に全員で大学内にある寮（ユニデンス）のゴミ置き場に物資調達に出かけることにした。

異臭を放つ巨大なゴミ集積場に全員で侵入し、そこからダンボールや空き缶や雑誌などのあらゆる「ゴミ」の類を引っ張り出して、ビニール袋にまとめ、持ち帰った。これらの道具は研究室に1ヶ月にわたって一時保管した。授業後に提出してもらったレポートのなかで、このときの体験について書いてあるものが多くあり、印象深かったようである（後述）。

〈不法占拠で家を建てることを想像する〉

今回、「ホームレスの家」の設置場所は大学内とした。本来であれば、大学近くの駅前広場や河川敷に作るのが体験学習としては最善であったが、先述のとおり様々な制約もあったため、大学内となった。

とはいえ、大学のメイン校舎（アカデミックキューブ）の正面入口付近に設置することにした（写真1）。あえて人通りが多く、目立つ場所にいきなり「ホームレスの家」が建つことに体験学習としての意味があるといえよう。また、大学の土地をいわば「不法占拠」して「家」を建てるという体験をしてもらうことにも意味があった。メイン校舎の正面に許可なくいきなりダンボールで「家」を建て、ホームレスの格好をした学生が1ヶ月ほど「住み込む」というのが理想であった。

しかしながら、念のため大学の管財課と学事課に感触をたしかめたところ、まったくもって「許可」は出なかった。ホームレスの「家」にそもそも許可は必要

ないのだが、当該授業のある毎週火曜日の朝から夕方まで、4週間だけ「家」を建てて壊すのを（4回）繰り返すことが黙認されるはこびとなった。ちなみにこのことは、クリーンキャンパスを謳う昨今のネオリベ化された大学がいかにも「不法占拠」ないし「他者」に対して不寛容であるかを示しているように思う。このような大学という場で果たして「他者理解」のできる人間を育てることができるのか、いささか疑問に思わざるを得ない。

4. 体験学習：ホームレスに「なりきる」

「ホームレスになりきってください」と伝えたことで、学生たちは服装や変装にも気をつかうべきだとの話になり、グループディスカッションは大いに「盛り上がった」。題材が「ホームレス」であったので、いささか不謹慎ではあったものの、ここでは、授業に参加して〈行為主体性〉を発揮することにいっそう前向きな態度を示してくれたことを高く評価したい。女子学生も当日はジャージや古びたTシャツに着替え、男子学生は付けヒゲをつけて寝てみたり、カップラーメンを持参して地面に座り込んで食したりする者もいた（写真2）。

「家」は学生一人ひとりに建ててもらいたかったが、時間制約上、グループごとに作成することになった。また、一定時間滞在することについては、学生一人あたり1日、あるいは宿泊してもらうのが理想的であったが、授業時間内におこなう必要があったため、一人30分から1時間、「家」の中や付近に滞在して「ホームレスになりきる」ことにした。

これらの準備をした上で、2012年5月から6月にか



写真1 大学のメイン校舎正面にいきなり出現した「ホームレスの家」。



写真2 付けヒゲに帽子、酒ビン。完全に「なりきって」いる。

けての毎週火曜日に、学生による「ホームレスの家」が4週にわたって大学キャンパス内に出現した。「家」は1限の授業中に設置し、昼休み(12:10)から「ソーシャルワーク演習Ⅰ」の授業のある3限の終わり(14:20)にかけて、ホームレスの格好をした学生が「住み込ん」だ。

学生たちは各々、寝転んだり、空を眺めたり、雑誌を読んだり、カップラーメンを食べたりしていた(写真3・4)。当初は「地面に寝るなんてアリエナイ」「恥ずかしすぎる」「やりたくない」という声も多くあったが、はじめてみるとどの学生の表情も非常に明るかった。5月の陽気の良い季節であったことも幸いして、「ホームレスになりきる」体験学習はおおむね好評であった。



写真3 それぞれ、好きなかたちで「ホームレス」になってみた。



写真4 屋外で寝ころぶのは意外に快適。これは重要な発見であった。

5. 体験学習から得られたこと：学生のレポートから

「ホームレス体験」をした学生たちの反応は予想以上に興味深いものとなり、この体験学習に一定の意義があったことをうかがわせる。以下、学生が書いたレポートの中から文章を引用しつつ、簡潔に考察してみたい(アンダーラインはすべて筆者によるもの)。

(1) 当事者が抱える複雑な感情への共感

体験学習を進めるにあたって、非常に多くの学生が「恥ずかしい」という感情を最も強く持ちつづけたようである。実際に体験をしている間にも、友達に見られたくない、知っている人と会いたくないという言葉をしきりに口にする者が多くいた。

しかし、体験学習を通して、ホームレスには「恥ずかしさ」以外にも入り組んだ様々な感情があることを感じ取ったようである。それらは、「申し訳なさ」「軽蔑の眼差し」「嫌悪感」などと表現されている。

「ホームレスの家を作って思ったことは、はじめはすごく恥ずかしかったけれども、作っていくうちに恥ずかしさはなくなっていき、ここに住み着くという意識と申し訳なさ感が同時に出てきた。ここに住み着くということは、他の人の邪魔になるということになるから、申し訳ないのだと私は感じた。」(Aさん)

「駅などでときたま見かけるホームレスの人々、とても近寄りたがたい印象を受ける。しかし、相手だつてつねに他人の目にさらされていて、好奇の目、軽蔑の眼差しが少なからずあって、嫌なんだろうと思う。彼らはそのような場所で生きているのだ。多分、私なら発狂してしまうのではないかと思う。」(Cさん)

「家を作るために使う段ボールを集めるために、実際にゴミ置き場に行ったのだが、その段階から本当にこんなことをするのだろうかと思ふ不安が出てきた。それは汚いゴミや段ボールに対する、不潔・悪臭などに対する嫌悪感からくるものであった。」(Jさん)

(2) 公共の場所を占有することへの理解

ホームレスの家を建てるという行為は、当然ながら公共の土地を占有する(あるいは「不法占拠」する)ということの意味する。これについては、一般論とし

ては公共の土地を私的に占有してはならないということが強調して言われるが、体験した学生たちの見解はもっと寛容であった。

「ホームレスの家を作るということは、公共の土地を勝手に使うということなので、ダメなことだと思っていたが、たとえダメな場所だとしてもそこが彼らにとって最適な場所なのだったら仕方ないのかなと感じてしまった。」（Aさん）

(3) 当事者の〈エージェンシー〉や〈生きざま〉への歩み寄り

体験学習の趣旨として、当事者の〈エージェンシー〉や〈生きざま〉を感じてほしいと考えていたが、学生たちのレポートの中からこれらについての一定の成果らしきものを感じさせる文章を見出すことができた。

「ユニデンスにゴミ拾いに行ったとき、ゴミのにおいがとんでもなく強烈だったのを覚えている。腐敗し始めたゴミもあったためだろう。においは想像を絶した。ホームレスはこのようににおいにも耐えなければならず、それでも過酷な状況の中でも強く生きているのだと思った。」（Cさん）

「ホームレスになるためにまずはゴミ集めから始めました。ユニデンスのゴミ置き場に行って、なるべくきれいなものを探し、何か使えそうなものはないか必死に選びました。ホームレスの人たちもこのような工夫とか苦勞をしているのだと思い、すごい精神力と、いろいろな意味で生きる力があるのかもしれないと感じました。」（Fさん）

「このような体験をしたからといって、ホームレスの人の気持ちになれたとは思っていません。彼らはいつになったらこの生活から抜け出せるのかわからないし、季節や天気に関係なく野外でダンボールで暮らしていて、気温に対応する服装もないし、食事もうるかにできないでいます。今回は授業中の短い時間にやったので、終わりもわかっていただけで、本当にいつ終わるかわからないのだとしたら、不安なり孤独を感じながらそれでも生きていくしかないのだと思いました。」（Gさん）

「少ない時間であったけれども、食べ物のゴミの腐敗臭や、多くの人から受ける冷たい視線はとて辛かった。一人で何もすることがないまま寝ていると、誰かに話しかけてもらうだけでも嬉しいものだった。ホームレスの人は『怖い、汚い、怠け者、犯罪者』

などといった印象が強いが、実際は一人寂しい中で、孤独に耐えて生きている人なのかもしれないと思った。」（Hさん）

(4) 屋外に寝ころぶ「心地良さ」の発見：ポジティブな共感

この体験学習で最も「想定外」であったことが、ホームレス状態になって地面に寝ころぶことを居心地が良いと感じた学生が複数いたことである。陽気の良い5月の晴天日であったことも影響しているが、学生たちの間では屋外でゴロゴロと寝ころぶことは必ずしも世間でいうほどネガティブな意味を帯びたもの（怠惰である、働いていない、ダメ人間である……）ではなく、やってみると意外に「心地よい」のだという発見がもたらされたことは重要である。もちろん、ホームレス状態にある当事者は貧困ゆえに（選択できずに）そのような状況にあるのだから、（Cさんが書いているとおり）「心地よさ」だけを強調することは当事者に対する失礼あるいは無理解を意味するのだが、ここで強調したいことは学生たちの間でホームレスへの「ポジティブな共感」のようなものがあつたことに意義を見出したということである。

「実際に寝てみるまでは、外で寝るということは周りにゴミがあつたりするから、汚くて生活がしにくく不潔だと思っていた。しかし実際に体験してみるとまったく違うイメージだったので驚いた。生活がしにくいわけでもなく、汚いわけでもないと感じた。」（Aさん）

「私はブルーシートの上で寝ることにした。だが寝るといっても地面は固く、人目にさらされていて、到底寝ることが出来る環境ではないのだ。しかし、固い地面の上であっても、人は心地良い風や穏やかな気候に包まれていると、それなりに心地よさを覚えるらしい。私は不思議なことに、地面の上で心地よさを覚えた。本物のホームレスの方には全く申し訳ないことだが、外に寝転んでいて心地よさを覚えずにはいられなかった。周りの視線も、幸か不幸か人通りが少ない時間帯だったせいかあまり気にならなかった。多少の恥ずかしさはあつたが、時間がたつにつれて慣れてしまった。要するに、くつろいでしまったのだ。」（Cさん）

「最初は恥ずかしくて、人が通るたびに少しドキドキしていました。しかし、少し慣れてくるとそこま

で人の目も気にならなくなってきたし、逆に外で寝ることが気持ちいいと思えるようになってきました。もちろん大学の敷地内だし、授業の一環としてやっていることですので、特に抵抗なくできた面はありますが、結論としては、やむを得ず路上生活をしている人は、最初は抵抗がありつつも、少しずつ慣れていって、それなりに快適になっていくような気がしました。路上生活者にとってはその生活が普通のことになるわけですので、本人にとっては、私たちが普段生活しているのとさほど変わらない日常なのではないかと思いました。」(Dさん)

「実際に寝てみると、視線が気になるのかと思いきや、自分はそんなに気にならなかった。決してマイナスの感情だけが沸いてくるというものではなく、これはこれでいいのではないかと思うようになってしまった。だからこそ、ホームレスはなかなかその生活から抜け出せないのではないだろうかと思った。」(Eさん)

6. むすび

体験学習に参加したゼミの学生たちの多くが「当事者の視点」を学ぶことに一定の意義を感じることができた様子であった。Bさんはレポートの最後に、「今回のホームレス体験では、当事者の気持ちを考えることをおろそかにしてはいけないということを学ぶことができた」と書いている。



写真5 多くの通行人から様々な視線や反応を感じながらの体験であった。



写真6 昼寝をする「心地よさ」は学生だからこそすぐに直感できたのかもしれない。

題材がホームレスというハードコアな問題であるため、今回の「疑似体験学習」のやり方には少なからぬ無理や偏見・スティグマがともなうこともあったが、理解しにくい「他者」であるホームレスという当事者の〈生きざま〉を知ることのワクワク感を体験してもらうことには一定の成果があったのではないかと考えている。理解しにくい「他者」を知ることの喜び、あるいは人間の〈エージェンシー〉となる諸要素の発見をテーマに、今後もポジティブな社会福祉教育のあり方を考えていきたい。社会福祉教育が若者を失望させることのないように。

〈参考文献〉

- ・青木秀男編著 (2010) 『ホームレス・スタディーズ』 ミネルヴァ書房
- ・生田武志 (2005) 『〈野宿者襲撃〉論』 人文書院
- ・宇都宮健児・湯浅誠編 (2008) 『反貧困の学校 貧困とどう伝えるか、どう学ぶか』 明石書店
- ・神戸幸夫 (2010) 『転落：ホームレス100人の証言』 アストラ社
- ・坂口恭平 (2004) 『0円ハウス』 リトルモア
- ・鈴木忠義編 (2010) 『学生たちの目から見たホームレス：新宿・スープの会のフィールドから』 生活書院
- ・松井計 (2003) 『ホームレスだったばかりから、きみたちへ：共に生きる社会を考えよう』 実業之日本社
- ・村田らむ (2004) 『ホームレス大図鑑』 竹書房
- ・Lister,R. (2004) Poverty, Polity Press (松本伊智朗監訳, 2011, 『貧困とはなにか』 明石書店)

(2013年2月13日受理)